

## 活人剣とその再建 ―竣工式によせて―

岡本 隆司

### 縁 起

静岡県袋井市にある可睡斎。徳川家康ゆかりの、また牡丹でも有名な曹洞宗の名刹である。京都生まれの京都市育ち、遠州にはまったく縁もゆかりもなく、また実家の宗派も異なる自分には本来、知る由もないお寺だった。

その可睡斎にここ数年、ほぼ毎年訪れている。改宗して参拝・墓参をするわけでもなければ、にわかに牡丹を愛でる習慣・風流が身についたわけでもない。ひとつの事業に関わっていたからである。

JR 袋井駅からバスに乗って15分くらい、降りて少し歩くと、正面の石段が見えてくる。そのまま登ってゆくと、左手に見えるのが青銅の彫像。山門をくぐって、さらに左手に回ると、その全体が目に入ってくる。宮田亮平・東京藝術大学学長の手で再建成った「活人剣」である。

文字どおり軍刀を模したモニュメント、空に向いた全高は約6メートル。参拝者が必ず目にする山門と輪蔵の間に屹立する。基壇は花崗岩で六角形の角錐状に構成し、中段に彫金を施した円状の台座が据えられた。

去る9月26日はその竣工式、筆者もお招きを受けて参列した。少し慣れない曹洞宗の法要をすませると、関係者そろっての講演会・記念撮影。事業も一段落ついたのだ、と少し感慨深いものがある。

というのも、この「活人剣」の再建事業は4年前からはじまっていて、その当初から微力を求められたからである。微力というのは、中国近代史に関わる話題提供であって、そもそも自分には、それしか能がない。しかしなぜ、袋井にある禅寺と中国近代史が結びつくのか、といえば、それはやはり「活人剣」の御縁である。

### 活人剣

人を活かす剣、とは佐藤進の佩刀を指す。佐藤はのち順天堂第3代堂主となる医師、「活人剣」はそんなかれの偉業を偲ぶモニュメントである。偉業とは何か。明治28年（1895）に日清戦争講和のため来日した李鴻章の命を救い、和平交渉を途絶させなかったことである。李鴻章はこの年の3月20日、清朝の全権代表として下関にやってきた。交渉もはじまった同月24日、重大事件が突発する。夕刻、宿舎に向かう李鴻章を、暴漢が銃撃し、弾丸が顔面をとらえたのである。

李鴻章の身体はもはや、かれ一人のものではない。戦場にいるおびただしい人命を左右する。日本政府も必死だった。国際的な信用にもかかわる。そこで白羽の矢を立てたのが、陸軍軍医

総監の佐藤進。ドイツ留学の経験があり、当代第一の名医と評判だったかれは、翌日下関に到着し、みごとに李鴻章を治療した。4月に入って、講和交渉は再開、下関条約の締結にいたる。

国家の負託にこたえた佐藤も立派だが、敵国の医師にすべてを委ねた李鴻章も、只者ではなかった。そんな二人だから、親交が深まって当然である。

ある日、軍医の正装で帯刀して治療にあたっていた佐藤に、李鴻章は「なぜ医者には剣があるのか」と問うと、佐藤は「この剣は人を活かすための剣、活人剣である」と禅のこたえを引いて答えた。大いに感じ入った李鴻章は、その感慨をあらためて漢詩にしたため、佐藤に贈っている。



モニュメント「活人剣」は、この逸話にちなんで、佐藤ゆかりの禅寺可睡斎の斎主・日置黙仙が、明治33年（1900）に建立したものである。李鴻章の漢詩と日置黙仙の願文、および当時の仏教界の重鎮・大内青巒の文とが、石碑・基壇に刻まれ、彫刻家・高村光雲の制作になる20尺の剣が据えられた。日清の戦没者を供養し、あわせて世界の平和を祈る趣旨である。

ところが昭和19年（1944年）、「活人剣」の金属部分は、戦争末期の要請で鋳出され、基壇・石碑もその後、荒れたままとなってしまう。戦後70年たち、「活人剣」碑の存在は、人々の記憶からも消え去ろうとしていた。

## 再 建

そのありさまに心を痛めたのが、ほかならぬ地元の方々である。再建を志し、「活人剣」のある可睡斎、佐藤進が発展させた順天堂と提携され、事業をすすめてこられた。筆者もその過程で、お声がけをいただいたのである。

少しは李鴻章周辺の史実に明らいたらうとのご依頼。ところが、「活人剣」の存在・縁起、李鴻章の逝去までつづいた佐藤との交誼、漢詩や書翰のやりとり・贈答などなど、むしろこちらが学ぶばかりの日々であった。あえて同学・門下に紹介したのも、そんな思いからである。

その「活人剣」の再建が成った。ちょうど日清戦争終結120周年・第二次大戦終結70周年という節目の昨年。その年に実現できたのは、やはり関係者の並々ならぬ決意と努力のたまものだろう。

「願はくば干戈を化して太平を見ん」。李鴻章が詠んだ「活人剣」の漢詩の一節である。かつて日中を結びつけ、平和を祈願した「活人剣」の再建には、それが二度と壊され、失われる時代の来ないように、切に願う関係者の思いがこもっている。単なる遺跡・遺産ではなく、今に生

き、かつ活かす「史蹟」の誕生といえよいだろうか。

なればこそ、新しい「活人剣」は場所を移し、意匠も一新された。何より人々に親しんでもらわねばならないからである。もとの「活人剣」は、秋葉総本殿横の石段を登っていった先の奥之院近くにあって、いささか遠い。刀身のオリジナルな形態が不明なこともあった。しかし基壇と詩碑の残る旧「活人剣」も、もちろん放置はされていない。まもなく整備が施され、歴史を偲ぶ遺跡として甦った。

「史蹟」なるものは、過去を示すばかりではない。すぐれて現代的な存在でもある。それがいかにできあがり、保存活用されてゆくのか。その典型的な一事例を目の当たりにしたようにも思える。

新「活人剣」の竣工式は、その節目をなすものだった。はからずも袋井に御縁ができ、その場に立ち会えたのは、歴史家の冥利につきるというべきだろう。(2016年2月16日脱稿)